

第4回

ローマ帝国

監修・講師
本村凌二

学習のねらい

人類史5千年のなかでも4千年間は古代だった。とりわけ地中海世界の古代史は、文字の誕生から古代末期における一神教の普及まで、それを抜きには世界史を語れないほど大きな影響を持っている。この古代の最終段階に登場したのがローマ帝国であった。圧倒的な覇権をもつ世界帝国はいかにして興隆したのか、また、その平和と繁栄はいかにして維持されたのか。そして、空前の大帝国もどのようにして衰退の過程をたどることになったのか。それらの点について考えてみよう。

＜ローマ帝国の繁栄 都市国家から世界帝国へ＞

共和政 カエサル オクタヴィアヌス アウグストゥス 元老院

帝政 ローマの平和（パックス・ロマーナ） パンとサーカス

＜キリスト教の成立＞ イエス キリスト教

＜ローマ帝国の解体＞ コンスタンティヌス帝 コンスタンティノープル

ローマ帝国の繁栄 都市国家から世界帝国へ

古代地中海世界には千を超えるポリス（都市国家）があったと言われる。それらのなかから、なぜローマだけが大きい覇権をにぎり世界帝国にまで成長したのか。それは古代人にとっても興味深いことだった。

ローマは500年にわたって共和政の伝統を守りつづけた。カエサルの登場とともに独裁権力が生み出されるが、帝政を始めた初代皇帝アウグストゥスは、共和政の伝統である元老院を重視し、市民が政治をチェックする仕組みを尊重した。以後200年の間、ローマはローマの平和（パックス・ロマーナ）と呼ばれる最盛期を迎える。また、ローマは支配した土地にローマ風の街をつくり異なる民族でもローマと同じ豊かな生活が送れるようにするだけでなく、その土地の宗教や風俗習慣を認めた。しかし、やがて大きな転機がおとずれる。

■■■ キリスト教の成立 ■■■

大自然のなかに超自然的な存在を感じる人間にとって、神々を崇めることはどこの地域でもある当然の成り行きだった。だが、この多神教の地中海世界にあって、古代末期になると、唯一神を崇める**キリスト教**が広く人々の心をとらえた。

ローマ帝国の下で多神教世界から一神教世界への大転換がおこったことは世界史上の大事件である。その出来事の推移に注目してみよう。

■■■ ローマ帝国の解体 ■■■

古代ローマ帝国の衰退は、3世紀の軍人皇帝が乱立した時代に始まる。皇帝は軍事力や経済力にものをいわせ共和政の伝統は軽んじられようになる。そうして独裁体制が生まれると暗殺が相次ぎ、皇帝の権威は失墜していく。皇帝はキリスト教を認め、その力を利用することで権威を取り戻そうとするが、「ゲルマン人の大移動」の混乱のなかで、4世紀末、帝国は東西に分裂する。やがて、さらなる混乱が重なり、476年、西ローマ帝国は滅亡した。

帝国が解体されていく経緯を、統治の仕方の変容とキリスト教の広まりと合わせて見てみよう。

考えてみよう 調べてみよう

- ローマの政治のしくみを、アテネとも比較し、整理してみよう。
- 古代都市ポンペイはどこにあったのか、首都ローマとの関係で確認しよう。
- 古代ローマの遺産は、その後のヨーロッパ世界にどう継承されていったのか調べてみよう。